

## 木炭運び（学徒動員）

大分県玖珠郡玖珠町 渡辺 久

尋常高等小学校は昭和17年と18年度の2年間の通学であった。その2年生になってから生徒の動員される日数も多くなった。働き盛りの青壮年が兵役につき、農山村は人手不足でどこの家庭も窮地に追い込まれていたため、軽作業を子供が手伝うのは当たりまえであった。私のクラス62人も、先生からの命令で授業はそっちのけであちこちに行っていた。

仕事の内容は「田の草取り」、「杭木かつぎ」、「田んぼの排水工事」、「木炭運び」など、この中から特に私がきつかった仕事を取り上げたい。それは木炭運びであった。木炭を製造する事を炭焼きと言うが、この炭焼き窯のある所は大抵山間の奥地の集落が多かった。そこで農家が大量に生産をしていた。当時、馬車やリアカーはあったが、何しろ山の中までは道路がないため、牛馬に背負わせて駅まで搬出していた。しかし牛馬では1日1回しか出ないから「埒」があかない。そこで学徒が動員されていたのである。数十人が行けば100個以上の木炭が1日で出荷でき能率的である。

あれは昭和18年の5月だった。前日、学校で「明日は『朝見岳』という集落に木炭の搬出に行くからその用意をして登校することと担任のM先生の声は大きい。村までの距離は約1里（4km）とのこと。私は家で父母が小規模だが炭焼きをしていたから大体の事は知っている。学校から帰るなりこの話をすると、道のりを知っている父は「それは骨折るぞおう」と言った。落胆したがつらい仕事であることははっきりしている。しかしそのために欠席したのでは先生のお叱りを受ける。当時は決戦下、軍国主義の時代である。先生とか巡査は怖い存在でもあった。

そして、当日登校すると教科書類は学校に置いて、「弁当」だけを腰にさげ出発した。目ざすは『朝見岳』、初めて訪れる村であった。1クラス62人が長蛇の列となり、曲がりくねった山道をぐんぐん登ること約2時間で目的地に着いた。標高500mの村は十数軒の家が点在していた。炭焼き窯のあるところはそこから更に奥地にあった。現地では炭窯から出る青い煙が静かに立ち昇り、炭焼き独特の臭いが辺りに漂い、のどかな風景であった。

茅葺きの掘立小屋には製品の木炭が山と積まれ出荷を待っていた。大体、市販される木炭というのは茅で編んだ炭俵に入っているのが普通であった。軍需用は通称を『ガス炭』と呼び、軍のトラックや一般のバスやトラックに使われ、紙袋入りで重量が15kgとなっていた。そして検査済みの小さな証紙が貼られていた。

私たちは到着後「弁当」を食べて暫く休んだあと、いよいよ出発する事になった。先生から『一人2袋ずつ背負うこと』と言う命令が出る。各自、持参の紐を地べたに敷き、それに木炭を2袋重ねて紐を頭から被るようにして胸にしっかり縛りつけた。腰を曲げて立ち上がろうとするがなかなか立てない、同僚に引き起してもらいやっと立った。重量30kgはずっしりと重

い。体を前かがみにしていないと後ろに引き倒されそうである。2、3歩歩いて考えた。自分の体重が23kg、身長が131cm（当時の通知簿から）であるからこれはかなりきつい、北山田駅まで無事到着できるであろうか、心配である。頑張ろう、負けてたまるかである。

みんな背負ったところで炭焼き窯を出発、下りの急勾配は特に足に力が懸かる。背中の重ねた木炭がずれるため、誰も腰をおとしては修正している。1時間も歩くとぼつぼつ疲れが出始めた。先生も気を使って、誰それとなく『頑張れ、落伍するなよ』と発破をかける。みんな背負い紐が胸に食い込んで痛いと言う。私は朝家を出るとき、母が藁縄やロープでは胸が痛いからと、浴衣を着る時の柔らかい帯を用意してくれていた。布製であるから確かに肌当たりが良い。母の心づかいに感謝した。

道程の約半分の2kmを過ぎるといよいよ重たく感じる。荷物の木炭が尻の方にずり下がり、そのため、ちょっとした段に腰を下ろしては「一服」休憩が多くなった。汗びっしょり。疲れもでてきたが泣きだしそうである。ここで座り込んで恥をかく。体格の良い同僚はとっくに先に進み姿は見えない。体の大小で格差がはっきりしてきた。小さな者同志が一団となり、お互い励ましながらかを下る。出発前に食べた弁当箱が嫌に邪魔になる。

「おーい、駅が見えるぞう」。先を行く誰かの声に勇気が湧く。薄暗い木立の中と岩山の間を通り抜けると急に視界が開けた。『戸の坂峠』というちょっとした展望所である。最後部について来た先生も木炭を降ろし暫時休憩、眼下に見える田園と、その中程を東西に走る一本の線が久大線（JR）である。その東の端に北山田駅が見える。「あすこ迄行くんかあ」。うんざりした誰かの声、道程はまだまだ遠い。「あと1時間半じゃ」、先生が勇気づける。いつ迄も休みたいが木炭運びという責任がある。ファイトを燃やし立ちあがる。狭い坂道も終わり段々畑を過ぎると道巾も広くなり県道に出た。『平川』と言う商店の並ぶ町を通ると終着地、北山田駅の農業倉庫に着いた。

先着の降ろした木炭の上に尻を向け、後ろに引き倒されるようにどっかりと座った。やっと着いた。胸に食い込んだ帯を解き立ちあがると妙に体が前のめりになる。そのはずである、出発して3時間以上、4kmの道程を体をエビのようにして歩いたからである。生徒の中でも体の小さい者ほど苦しい仕事であった。先生から「ご苦労であった、今後も戦争に勝つまではこうした動員に協力すること、これで解散」の声にみんな蜘蛛の子を散らすように家路を急いだ。と言っても私宅は学校までの道程は5kmはあった。帰り着くなり縁側に座り込んだ。そして何日も足が痛かった事が思い出される。

一億総決戦とかで学徒の動員は続いたが、仕事の内容では欠席した。父母も私の話を聞き、『か弱い体で可哀相だ』と思い、出席を強要はしなかった。そして荷重の計算をすると体重の10倍を背負ったことになり、重労働であった。こんなことで高等科2年は出席235日、欠席21日と通知簿に記されている。あれからもう50年、辛酸をなめた苦労は一生忘れられない。